

講義による血液型性格判断に対する態度の変化 (2)
—オンデマンド講義におけるニュース映像視聴の
有無による比較—

織 田 弥 生
菊 地 賢 一

実践女子大学人間社会学部

紀 要 第20集 抜刷

2024年 3 月 31 日発行

講義による血液型性格判断に対する態度の変化 (2) —オンデマンド講義におけるニュース映像視聴の 有無による比較—

織田弥生

実践女子大学人間社会学部非常勤講師

菊地賢一

東邦大学理学部

要約

本研究は、オンデマンド講義において血液型性格判断を否定する内容のニュース映像を見せることにより、血液型性格判断に対する態度を長期的に変化させる効果があるかを検討することを目的とした。都内女子大学生を参加者とし、「ニュース映像なし条件」($n = 43$, 平均年齢 20.1 才), 「ニュース映像あり条件」($n = 34$, 平均年齢 19.9 才)に分け、授業の一環としてオンデマンド講義を実施した。参加者は血液型性格判断を否定する内容の講義を受講し、「ニュース映像なし条件」の参加者はパワーポイントで作成した授業動画のみ、「ニュース映像あり条件」の参加者は授業動画に加えて血液型性格判断を否定する内容のニュース映像を視聴した。講義前、講義後、講義 4 週間後において「血液型と性格に関連があると思うか」について 4 段階で回答を求め、否定的態度・肯定的態度に分類した上で各条件別にコ克蘭の Q 検定及びマクネマー検定を実施した。その結果、「ニュース映像なし条件」では各測定回の間否定的態度・肯定的態度の割合に有意な変化はなく、「ニュース映像あり条件」では講義前と比較して 4 週間後に否定的態度の割合が有意に増加した。結果から、血液型性格判断を否定する内容のニュース映像の視聴には、血液型性格判断に対する態度を長期的に変化させる効果がある事が示唆された。その背景にはテレビ番組への信頼や、番組スタッフの体験を見たことによる観察学習、ニュース映像の内容が説得力のあるものだったことがあると考えられた。

序論

本論文で扱う「血液型性格判断」とは、ABO 式の血液型と性格に関連があるという考え方のことである。血液型と性格に関連があるという説は、心理学の研究においては繰り返し否定されている(松井, 1991; 縄田, 2014)。それにもかかわらず一定割合の人が血液型性格判断を肯定しており、小学生(伊藤, 1996)、大学生(佐藤, 1993; 上瀬・松井, 1996)、専門学校生(サトウ・

上村, 2004), 成人(白佐, 1991)など, 幅広い世代に浸透している。血液型性格判断を信じる人が多い要因として, 宮本・田村(1995)は自分の性格の認知における誤謬(バーナム効果, ラベル付け, 自己成就予言など), 対人認知における誤謬(ステレオタイプ), 統計的な発想の欠如, 偏見・差別としての血液型などの要因を指摘している。山岡(2011)はある特定の身体的特徴を持つ人々を否定的に扱うことは差別であることから, 特定の血液型の人を否定的に扱うことも差別であると警鐘を鳴らしている。このような根拠のない差別は解消されるべきものであると考えられる。

今まで, 大学の講義等を通して正確な情報を与えることによって血液型性格判断に対する態度を変容させる試みがなされている(上瀬・松井・古沢, 1991; 上瀬・松井, 1996; サトウ・上村, 2004)。織田・菊地(2022)はこれらの先行研究に対し, ①長期的な効果についての研究が少ない, ②態度の測定が否定的・肯定的のように明確な形で行われていない場合がある, ③オンライン講義の検討がなされていない, という点を指摘した上で, 血液型性格判断に対する態度(「否定的」か「肯定的」か)が, 講義(血液型性格判断を否定する内容)によって変化するかを都内女子大学において検討した。対面講義ではパワーポイントを用いた講義を教室で実施し, オンデマンド講義では対面講義で使用したものと同様のパワーポイントのファイルに教員が音声を録音し, 作成した動画を配信した。参加者はこれらの講義を, 授業の一環として受講した。血液型性格判断に対する態度は, 「血液型と性格に関連があると思うか」という質問を講義前, 講義後, 講義4週間後に行い, 4段階で回答を求めることで測定した。4段階の回答を否定的態度・肯定的態度に分類して検討したところ, 対面講義では講義前(47%)より講義後(90%)の方が否定的態度の割合が増え, 4週間後も高い割合のままであった(80%)。一方, オンデマンド講義では講義前(49%)より講義後(87%)の方が否定的態度の割合が増え, 短期的な効果は見られたものの, 4週間後の割合は講義前と有意差がみられず(66%), 長期的な効果は見られないという結果であった。

オンデマンド講義で長期的な効果が見られなかった理由の一つとして, 織田・菊地(2022)は「ニュース映像の有無」を挙げている。対面講義では血液型性格判断に対して否定的な内容のニュース映像を見せていたが, オンデマンド講義ではこの映像を見せていなかったことから, それが影響した可能性である。このニュース映像は2007年5月1日にTBSイブニングニュース内で放送された約10分の特集で, 血液型性格判断には根拠が無いことを説明したものであった。その内容は, ①血液型性格判断の歴史, ②生物化学者による否定的解説, ③心理学者による否定的解説, ④数名の番組スタッフが, ランダムに呈示されただけの血液型心理検査の結果を信じてしまう映像, などから構成されていた。このニュース映像の有無によって態度の変化の長期的効果に影響が出た可能性がある。しかし総務省情報通信政策研究所(2023)によれば, 2022年の調査において10代・20代は平日・休日ともテレビを見るよりインターネットを見る時間の方が圧倒的に長い。それでもテレビのニュース映像は大学生に影響を与えるのだろうか。2つの点から検討する。1つ目は, テレビ番組への信頼度である。総務省情報通信政策研究所(2023)によれば, 視聴時間はインターネットの方が長いものの, 「世の中のできごとや動きについて信頼できる情報を得る」目的で最も利用するメディアは, 10代ではテレビが55.7%と半数を超えている。また20代ではインターネット(44.2%)の方がやや多いもののテレビも同程度の値であり(43.8%), テレビは若年

層においても信頼できる情報源と考えられていることがわかる。また村井・浅井・宇治橋・齋藤・堀田（2021）は大学生を対象としてテレビ番組への信頼度を尋ねた結果、「信頼している」と「どちらかといえば信頼している」の割合の合計が、全体の8割を超えていることを示している。また山岡（2011）は血液型性格判断関連のテレビ番組が多く放送された年の前後で、調査で得られた各血液型の持つイメージが変化していることから、テレビ番組が影響した可能性を指摘している。よって大学生にとってテレビは未だに信頼できる情報源であり、ニュース映像を見ることで態度が影響を受けた可能性が考えられる。2つ目は「経験」に影響した可能性である。織田・菊地（2022）において、血液型性格判断に対して肯定的だった参加者が挙げた理由として「自らの経験」（自分や身の回りの人にあてはまる、自分の人間関係（相性）に血液型が影響している）が一貫して多かった。このニュース映像には、番組のスタッフが、よく当たると評判の「究極の血液型心理検査」のウェブサイト（実際は検査結果として本人の血液型と関係のない内容を表示するというしかけがある。現在は閉鎖）（松岡圭祐事務所，2006）で、自分の検査結果を「当たっている」と感心し、その後種明かしをされてショックを受けるという映像が含まれていた。これは参加者自身の経験ではないが、実在する人物が「当たらない経験」をして落胆するのを見るのが「観察学習」となった可能性がある。観察学習とは、学習者自身が経験していなくても他者（モデル）の行動を観察することにより成立する学習のことであり、モデルの行動は目の前で直接観察する場合でも、映像などによる間接的なものであっても生じると言われている（山・山口・小林，2009）。よって血液型性格判断が当たらなかった人が落胆の様子を見たことが観察学習となり、肯定する理由である「自らの経験」に影響した可能性も考えられる。以上のように、ニュース映像の視聴はテレビへの信頼と観察学習による「経験」への影響によって、態度の長期的変化に影響を及ぼす可能性がある。

本研究の目的は、パワーポイントで作成した動画のオンデマンド講義において、血液型性格判断を否定する内容のニュース映像の視聴の有無が、血液型性格判断に対する態度の長期的な変化に与える影響を検討することである。方法として、パワーポイントで作成した講義（血液型性格判断を否定する内容）の動画のみを見る条件（ニュース映像なし条件）と、講義動画に加えて血液型性格判断を否定する内容のニュース映像を見る条件（ニュース映像あり条件）を設ける。そして講義の前後で血液型性格判断に対する態度について4段階で回答を求めて否定的態度・肯定的態度に分類し、講義前後での短期的な効果、および4週間後の長期的な効果を検討する。また織田・菊地（2022）に倣い、血液型性格判断を否定する理由・肯定する理由について講義前、講義後、4週間後に自由記述を、講義後には講義の感想の自由記述を求め、内容を検討する。

方法

参加者

都内女子大学において「教育・学校心理学」の履修者を対象として実施した（履修学年：2年生から4年生）。調査への参加は任意であること、結果は統計的に処理し、個人データは公開しない

ことを教示し、同意した人のみ調査に参加した。参加者は「ニュース映像なし条件」が女性43名(2021年度実施, 履修112名, 完答率38.4%, 平均20.1才), 「ニュース映像あり条件」が女性34名(2022年度実施, 履修104名, 完答率33.7%, 平均19.9才)であった。質問は講義前, 講義後, 4週間後の3回実施したため, これら3回の全てに回答(完答)した参加者のみ解析の対象者とした。

講義内容

実験は2021年度, 2022年度それぞれの年度の半期の授業の中の1回分を用いた。講義は動画を用い, 参加者は動画が公開されてから1週間以内に視聴するというオンデマンド方式で実施された。講義の要素は①パワーポイントで作成した動画による講義, ②ニュース映像からなり, 「ニュース映像なし条件」では①のみ, 「ニュース映像あり条件」では①と②の両方を用いて講義を行った。①, ②の概要を以下に示した。詳細な内容については, 織田・菊地(2022)に記されているので, ここでは概要を示した。

① パワーポイントで作成した動画(約40分)(織田・菊地, 2022)

織田・菊地(2022)が宮本・田村(1995)を参考に, パワーポイントで作成した講義スライドを使用した。内容は, 血液型性格判断の歴史の紹介, 血液型と性格に関連はないことを示す研究(松井, 1991; 縄田, 2014)の紹介, 血液型と性格の認知に関連する要因の解説から構成されていた。パワーポイントに音声を録音したものを動画として配信し, 参加者はパワーポイントのスライドのPDFファイルをオンラインで配布された。

② ニュース映像(約10分)

織田・菊地(2022)で使用した, 2007年5月1日にTBSイブニングニュースで放送された, 血液型性格判断は根拠がないことを説明した特集映像を用いた。

質問内容および回答方法

回答にはアンケートアプリ「respon」を用いた。参加者は「血液型と性格は関係すると思いますか?」という質問に対して4段階(1: そう思わない, 2: あまりそう思わない, 3: ややそう思う, 4: そう思う)で回答し, 何故そのように考えるのかを自由記述で回答した。また講義の感想について自由記述で回答した(講義後のみ)。

手続き

手続きは織田・菊地(2022)におけるオンデマンド講義の方法を踏襲した。参加者は半期分の授業の中の1回分として「講義内容」に示した内容の講義を受講した。配布資料として, パワーポイントのスライドをPDFファイルにしたものがオンラインで参加者に配布された。「ニュース映像なし条件」の参加者は「講義内容」に示した①のみを, 公開から1週間以内の自由な時間に視聴した。「ニュース映像あり条件」の参加者は①および②を視聴した。当該講義の1週間前の講義動画を視聴した後(以下, 講義前とする), 当該講義の動画を視聴した後(以下, 講義後とする), 4週間後の別の講義動画を視聴した後(以下, 4週間後とする)の3回, 血液型と性格は関

係すると思うかについて4段階で回答し、そのように回答した理由を自由記述で回答した。講義後のみ、講義の感想についても自由記述で回答した。オンデマンド講義の視聴と質問への回答には1週間の期間が設けられていた。よって「講義前」と「講義後」の間隔は、最も短い場合は1日、最も長い場合は2週間になる可能性があった。同様に「講義後」と「4週間後」の間隔は3週間から5週間の範囲となる可能性があった。手続きをまとめたものを図1に示した。

測定		可能な回答間隔
講義前	1週間前の 講義動画視聴後	1日 ～2週間
	講義動画視聴（1週間視聴可能） ニュース映像なし条件（2021年度） ①パワーポイントの講義スライドに 音声を入れた動画（約40分） ニュース映像あり条件（2022年度） 上記①（約40分） +②ニュース映像（約10分）	
講義後	講義動画視聴後	
4週間後	4週間後の別の 講義動画視聴後	3週間 ～5週間

図1 手続きの概略図

解析

解析方法は、織田・菊地（2022）の方法を踏襲した。

血液型性格判断に対する態度の変化

織田・菊地（2022）に倣い、4段階の回答について、「1：そう思わない」「2：あまりそう思わない」を否定的態度、「3：ややそう思う」「4：そう思う」を肯定的態度と分類し、条件別に各測定回の否定的態度・肯定的態度の比率についてコ克蘭のQ検定を実施した。コ克蘭のQ検定が有意だった場合、ペアごとにマクネマー検定による多重比較を行った。 p 値にはBonferroniの調整を行った。

否定的・肯定的な態度の理由の自由記述の分類

分類は第1著者が行った。織田・菊地（2022）の作成した分類項目に従い、各項目に内容が該当する回答数をカウントし、参加者人数に対する比率（%）を算出した。一人の記述に複数の内容が含まれている場合は、それぞれの項目でカウントした。次に項目を代表するカテゴリに該当する項目数を合計し、各カテゴリの比率（%）を算出した。

講義の感想の自由記述の分類

分類は第1著者が行った。否定的・肯定的な理由の分類と同様に、織田・菊地（2022）の作成した分類項目に従い、各項目に内容が該当する回答数をカウントし、参加者人数に対する比率（%）を算出した。一人の記述に複数の内容が含まれている場合は、それぞれの項目でカウントした。

結果

血液型性格判断に対する態度の変化

「ニュース映像なし条件」の講義前、講義後、4週間後の血液型性格判断に対する否定的態度・肯定的態度の人数と比率の変化を表1、図2に示した。各測定回の否定的態度・肯定的態度の比率についてコ克蘭のQ検定を実施したところ有意な差が見られた ($Q_{(2)} = 6.632, p < .05$)。しかし多重比較の結果、各測定回の間には有意差はみられなかった。すなわち否定的態度の割合は全体としては変化しているものの、個別の測定回の間では有意な差が見られなかった。

表1 講義前、講義後、4週間後の否定的態度・肯定的態度の人数の変化 (ニュース映像なし条件)

	講義前		講義後		4週間後	
そう思わない	7	否定	12	否定	12	否定
あまりそう思わない	13	20	17	29	14	26
ややそう思う	21	肯定	11	肯定	14	肯定
そう思う	2	23	3	14	3	17

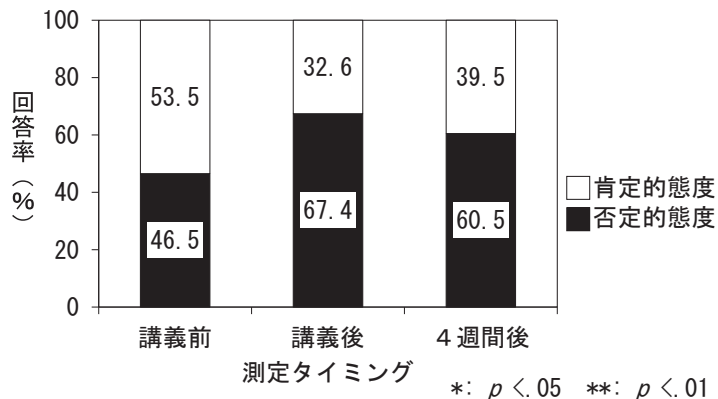


図2 講義前、講義後、4週間後の否定的態度・肯定的態度の比率の変化 (%) (ニュース映像なし条件)

「ニュース映像あり条件」の講義前、講義後、4週間後の血液型性格判断に対する否定的態度・肯定的態度の人数と比率の変化を表2、図3に示した。各測定回の否定的態度・肯定的態度の比率についてコ克蘭のQ検定を実施したところ有意な差が見られ ($Q_{(2)} = 12.167, p < .01$)、多重比較の結果、講義前と4週間後 ($\chi^2_{(1)} = 5.818, p < .05$) に有意差が見られた。すなわち、否定的態度の割合は、講義前より講義後の方が高くなったものの有意な変化ではなかったが、4週間後には否定的態度が有意に高くなっていた。

表2 講義前，講義後，4週間後の否定的態度・肯定的態度の人数の変化
（ニュース映像あり条件）

	講義前		講義後		4週間後	
そう思わない	7	否定	14	否定	8	否定
あまりそう思わない	10	17	11	25	18	26
ややそう思う	12	肯定	5	肯定	5	肯定
そう思う	5	17	4	9	3	8

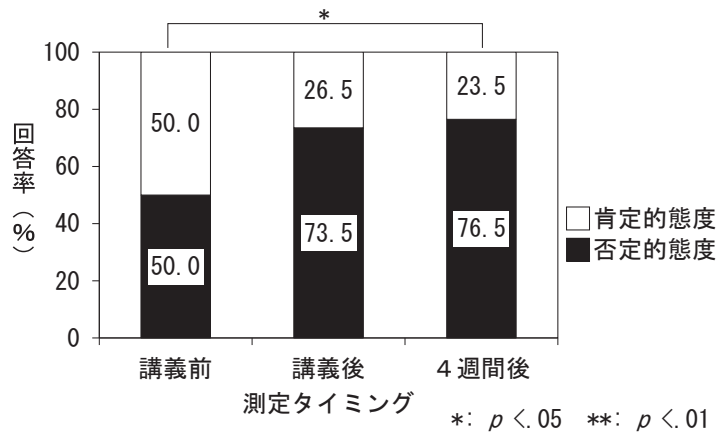


図3 講義前，講義後，4週間後の否定的態度・肯定的態度の比率の変化（%）
（ニュース映像あり条件）

否定的・肯定的な態度の理由

表3から表6に血液型性格判断に対して「そう思わない」「あまりそう思わない」という否定的な回答をした理由、「ややそう思う」「そう思う」と肯定的な回答をした理由についての自由記述を分類した結果を示した。織田・菊地（2022）に倣い，否定的態度であっても肯定的な理由，肯定的態度であっても否定的な理由を記述した少数の参加者の回答についてはカウントしなかった。表中の太字はカテゴリ名，細字は項目名である。カテゴリの比率（%）は，各カテゴリに該当する項目数を合計して比率（%）を算出した（無回答の参加者がいたこと，一つの自由記述に複数の内容が含まれている場合があることから，合計が100%になっていない場合もある）。

まず表3，表4に「ニュース映像なし条件」の結果を示した。否定的な理由（表3）として，「その他」を除くと，講義前において最も多かったのは「自らの経験（50%）」であった。しかし講義後は「授業（38%）」「根拠がない（21%）」が増加し，両者を合わせて59%となった。4週間後には再び「自らの経験（27%）」が最も多くなり，「授業（19%）」「根拠がない（12%）」がそれに次いだ（両者の合計：31%）。肯定的な理由（表4）については，最も多かったのは一貫して「自らの経験」であった（講義前：83%，講義後：57%，4週間後：47%）。

表3 血液型性格判断を否定する理由（ニュース映像なし条件）

	講義前	講義後	4週間後
参加者数	20	29	26
授業	0%	38%	19%
授業で学んだ		38% (11)	19% (5)
根拠がない	0%	21%	12%
血液型性格判断には根拠がない		21% (6)	12% (3)
自らの経験	50%	24%	27%
自分や身の回りの人に あてはまらない人がいる	25% (5)	17% (5)	15% (4)
同じ（異なる）血液型でも 性格が違う（同じ）人がいる	15% (3)	7% (2)	12% (3)
自分に、他の血液型の特徴があてはまる	10% (2)		
サブタイプ	0%	7%	4%
すべての人にはあてはまるわけではない		3% (1)	
一部しかあたっていない		3% (1)	4% (1)
メディアからの情報	0%	0%	0%
テレビなどで見た			
その他	65%	31%	50%
性格は後天的なものである（環境で決まる）	5% (1)		4% (1)
誰にでも当てはまることが書かれている		7% (2)	12% (3)
その他	60% (12)	24% (7)	35% (9)

太字はカテゴリ名，細字は項目名，カッコ内は人数を示す。
カテゴリの%は，各カテゴリに該当する項目数の合計の%を示した。

表4 血液型性格判断を肯定する理由（ニュース映像なし条件）

	講義前	講義後	4週間後
参加者数	23	14	17
自らの経験	83%	57%	47%
自分や身の回りの人に あてはまる	74% (17)	50% (7)	41% (7)
自分の人間関係（相性）に 血液型が影響しているから	9% (2)	7% (1)	6% (1)
メディアからの情報	13%	7%	12%
性格診断や占いが存在するから	13% (3)	7% (1)	12% (2)
テレビなどで言っているから			
サブタイプ	30%	7%	24%
一部の人には当たっている	4% (1)		
当たっている部分と、当たっていない部分がある	4% (1)		
ある程度当たっている	22% (5)	7% (1)	24% (4)
その他	13%	29%	18%
その他	13% (3)	29% (4)	18% (3)

太字はカテゴリ名，細字は項目名，カッコ内は人数を示す。
カテゴリの%は，各カテゴリに該当する項目数の合計の%を示した。

次に表5、表6に「ニュース映像あり条件」の結果を示した。否定的な理由（表5）としては、「その他」を除くと一貫して「自らの経験」が最も多かった（講義前：47%，講義後：36%，4週間後：38%）。講義後と4週間後には「授業」が理由の2位となり（講義後：24%，4週間後：19%）、「根拠が無い（講義後：8%，4週間後：12%）」と合わせると、講義後で32%，4週間後で

31%と、3割程度に増加していた。次に肯定的な理由（表6）としては一貫して「自らの経験」が最も多く、いずれも7割を超えていた（講義前：111%、講義後：89%、4週間後：75%）。

表5 血液型性格判断を否定する理由（ニュース映像あり条件）

	講義前	講義後	4週間後
参加者数	17	25	26
授業	6%	24%	19%
授業で学んだ	6% (1)	24% (6)	19% (5)
根拠がない	6%	8%	12%
血液型性格判断には根拠がない	6% (1)	8% (2)	12% (3)
自らの経験	47%	36%	38%
自分や身の回りの人に あてはまらない人がいる	12% (2)	8% (2)	12% (3)
同じ（異なる）血液型でも 性格が違う（同じ）人がいる	24% (4)	12% (3)	23% (6)
自分に、他の血液型の特徴があてはまる	12% (2)	16% (4)	4% (1)
サブタイプ	18%	4%	15%
すべての人にはあてはまるわけではない	6% (1)		12% (3)
一部しかあたっていない	12% (2)	4% (1)	4% (1)
メディアからの情報	0%	0%	0%
テレビなどで見た			
その他	29%	32%	27%
性格は後天的なものである（環境で決まる）	18% (3)	8% (2)	15% (4)
誰にでも当てはまることが書かれている	6% (1)	8% (2)	4% (1)
その他	6% (1)	16% (4)	8% (2)

太字はカテゴリ名、細字は項目名、カッコ内は人数を示す。
カテゴリの%は、各カテゴリに該当する項目数の合計の%を示した。

表6 血液型性格判断を肯定する理由（ニュース映像あり条件）

	講義前	講義後	4週間後
参加者数	17	9	8
自らの経験	111%	89%	75%
自分や身の回りの人にあてはまる	94% (16)	78% (7)	75% (6)
自分の人間関係（相性）に 血液型が影響しているから	18% (3)	11% (1)	
メディアからの情報	6%	11%	0%
性格診断や占いが存在するから テレビなどで言っているから	6% (1)	11% (1)	
サブタイプ	18%	0%	13%
一部の人には当たっている	6% (1)		
当たっている部分と、当たっていない部分がある ある程度当たっている	12% (2)		13% (1)
その他	0%	0%	0%
その他			

太字はカテゴリ名、細字は項目名、カッコ内は人数を示す。
カテゴリの%は、各カテゴリに該当する項目数の合計の%を示した。

講義の感想

講義の感想の自由記述を分類した結果について、「ニュース映像なし条件」の結果を表7、「ニュース映像あり条件」の結果を表8に示した。織田・菊地（2022）に倣い、各条件とも全体の回答中割合が多かった順に項目を並べた。また、講義後に否定的態度・肯定的態度だった参加者別の割合も算出した（無回答の参加者もいたもの、一つの自由記述に複数の内容が含まれている場合が多かったため、合計は100%を超えている）。

「ニュース映像なし条件」では「様々な心理的な要因で血液型と性格が関連すると思いついでいることがわかった」という知識に関する感想が、参加者全体・否定的態度・肯定的態度の参加者、いずれにおいても最も多かった。次に、参加者全体と否定的態度の参加者においては「血液型と性格には関連がない（根拠が無い）ことがわかった」という知識に関する感想、「驚いた、ショックを受けた、がっかりした」という感情に関する記述が多かった。また「血液型や占いに影響されないようにしたい」という感想も比較的多かった。肯定的態度の参加者で2番目に多かったのは「驚いた、ショックを受けた、がっかりした」という感情に関する記述と、「面白かった・興味深かった」であった。否定的態度の参加者と比べると「血液型と性格には関連がない（根拠が無い）ことがわかった」という知識に関する感想や「血液型や占いに影響されないようにしたい」という感想は、割合が少なかった。

「ニュース映像あり条件」においては「様々な心理的な要因で血液型と性格が関連すると思いついでいることがわかった」「血液型と性格には関連がない（根拠が無い）ことがわかった」という知識に関する感想が、参加者全体・否定的態度・肯定的態度の参加者とも上位となった。続いて多かったのは、参加者全体と否定的態度の参加者においては「面白かった・興味深かった」という感想、「驚いた、ショックを受けた、がっかりした」という感情に関する記述であった。肯定的態度の参加者においては「驚いた、ショックを受けた、がっかりした」という感情に関する記述が続いた。肯定的態度の参加者と否定的態度の参加者に大きな違いは見られなかった（割合のみを見ると大きな差がある項目もあるが、該当人数が1-2名であるため、ここでは議論しないこととする）。

表7 講義の感想（ニュース映像なし条件）

	講義後の態度		
	全体	否定的態度	肯定的態度
参加者数	43	29	14
様々な心理的な要因で血液型と性格が関連すると思 い込んでいることがわかった	63% (27)	62% (18)	64% (9)
血液型と性格には関連がない（根拠が無い）ことが わかった	37% (16)	45% (13)	21% (3)
驚いた，ショックを受けた，がっかりした	26% (11)	24% (7)	29% (4)
面白かった，興味深かった	23% (10)	21% (6)	29% (4)
血液型や占いに影響されないようにしたい	16% (7)	21% (6)	7% (1)
多くの知識を得られた	2% (1)		7% (1)
初めて知った	2% (1)	3% (1)	
多くの人に知ってほしい			
血液型と性格は（ある程度は）関連すると思う			
その他	2% (1)	3% (1)	

カッコ内は人数を示す。

表8 講義の感想（ニュース映像あり条件）

	講義後の態度		
	全体	否定的態度	肯定的態度
参加者数	34	25	9
様々な心理的な要因で血液型と性格が関連すると思 い込んでいることがわかった	76% (26)	76% (19)	78% (7)
血液型と性格には関連がない（根拠が無い）ことが わかった	47% (16)	48% (12)	44% (4)
面白かった，興味深かった	26% (9)	28% (7)	22% (2)
驚いた，ショックを受けた，がっかりした	18% (6)	12% (3)	33% (3)
血液型や占いに影響されないようにしたい	9% (3)	4% (1)	22% (2)
血液型と性格は（ある程度は）関連すると思う	3% (1)		11% (1)
初めて知った	3% (1)	4% (1)	
多くの知識を得られた	3% (1)	4% (1)	
多くの人に知ってほしい	3% (1)	4% (1)	
その他	6% (2)	8% (2)	

カッコ内は人数を示す。

考察

本研究の目的は、パワーポイントで作成した動画を用いたオンデマンド講義において、血液型性格判断を否定する内容のニュース映像の視聴の有無が、血液型性格判断に対する態度の長期的な変化に与える影響を検討することであった。そのためにニュース映像なしとニュース映像ありのオ

ンデマンド講義を行い、講義の前後で血液型性格判断に対する態度について4段階で回答を求めて否定的態度・肯定的態度に分類し、講義前後での短期的な効果、および4週間後の長期的な効果を検討した。その結果、ニュース映像なしのオンデマンド講義では講義により否定的態度・肯定的態度の割合に変化は見られたものの、各測定回の間には違いがみられず、短期的効果・長期的効果ともみられなかった。一方ニュース映像ありのオンデマンド講義では、4週間後の否定的態度の割合が講義前より多くなった。よって、パワーポイントの動画を用いたオンデマンド講義においてニュース映像を視聴することは、血液型性格判断に対する態度を肯定的から否定的に長期的に変化させる効果があることが示された。

織田・菊地（2022）の研究においては、対面講義では肯定的な態度から否定的な態度に変わる長期的効果が見られたものの、オンデマンド講義では見られず、その原因としては様々なものが考えられた。本研究においてオンデマンド講義と共に血液型性格判断を否定する内容のニュース映像を視聴した場合、態度を長期的に変化させる効果が見られたことから、ニュース映像の有無が要因の一つであった可能性が示唆された。

ニュース映像に効果があった要因として、3つの理由が考えられる。まず「序論」でも述べた通り、若年層においてもテレビは情報源としての信頼度が高いことである。そのため実際のテレビのニュースでも放送されたという点で情報の信頼度が増し、態度を長期にわたって変える効果が見られた可能性がある。2つ目の理由は、ニュース映像の中にあった、実際の番組スタッフが血液型性格判断が「当たらない」体験をして落胆したのを見て、観察学習がなされた可能性である。否定的態度・肯定的態度の理由として、「体験」を挙げた人が多かった。自分自身の体験ではないものの、「番組スタッフ」をモデルとして観察学習がなされ、それが「体験」に影響した可能性があるであろう。3つ目の理由として、ニュース映像の内容の説得力を挙げたい。このニュース映像は約10分間の特集であったが、その中では生物化学者、心理学者等が様々な観点から非常に論理的に血液型性格判断を否定していた。例えば生物化学者は、ABO式の血液型であればボンベイ型の性格がないのはおかしい事、血液型の分類法はABO式以外にも無数にある事などを説明した。また心理学者は血液型性格判断を信じる人がいる理由や、血液型性格判断が自分自身の性格を決めてしまい変化できる可能性を阻害している点について解説した。さらに序論で述べた「究極の血液型心理検査」のWebサイト（松岡圭祐事務所、2006）も紹介され、本人の血液型と検査結果には何の関連もないにもかかわらず、483万人が体験し、9割が当たっていると言ったこと、このように誰にでも当てはまることを言うのが「パーナム効果」と呼ばれるものであることも解説された（さらに番組スタッフがそれを体験した）。またBPO（放送倫理・番組向上機構）が血液型性格判断は差別につながる可能性があるため、テレビ局にそれを助長しないよう要望したということも紹介された。これらの多様な角度からの論理的な検証が、参加者に対して説得力を持ったものと考えられる。

織田・菊地（2022）のオンデマンド講義では講義前から講義後の短期的効果が見られたが、今回は両条件とも、短期的変化が見られなかった。織田・菊地（2022）のオンデマンド講義では講義後の否定的態度の割合が87%であったのに対し、今回の実験では「ニュース映像なし条件」で

67%、「ニュース映像あり条件」で74%と、どちらも割合が低かった。講義内容や講義の手法は織田・菊地（2022）と同様であるため、学生側の受け取り方の問題であると考えられる。しかし本研究からはその原因は明確ではないため、今後の検討が必要であると考ええる。

血液型性格判断に対して否定的・肯定的な態度である理由については織田・菊地（2022）に従って分類した。織田・菊地（2022）のオンデマンド講義の結果では、否定的態度の理由は講義前においては「自らの経験」という主観的理由であったが、講義後、4週間後は「授業」「根拠が無い」などの客観的理由に変化するという傾向があった。それに対し肯定的態度の理由は、講義前から4週間後まで一貫して「自らの経験」という主観的理由が多かった。この結果は、上瀬他（1991）の研究において、講義の前後も肯定する理由として「経験的理由」、否定する理由として「論理的理由」が多かったという結果と概ね一致していた。しかし今回の結果を見ると、否定する理由として、特に「ニュース映像あり条件」で、講義後や4週間後においても「自らの経験」の割合が比較的多かった。これは講義の感想を自由記述で求めている事に一因があると考えられる。参加者の記述に依存しているため、実際には他の理由があったとしても、書かれなければカウントされないからである。これを解決するには、理由についての項目を作成してチェックさせるなどの工夫が必要であろう。しかしそのことを考慮しても、肯定的態度の「自らの経験」の割合は非常に高かった。織田・菊地（2022）も述べているように、このような人に対しては「はずれた」という体験をさせる必要があるのかもしれない。

また本研究においては、否定的・肯定的な態度である理由の自由記述に「その他」に分類されるものが多かった。今回の分類は織田・菊地（2022）の分類と比較するため、同じ項目で分類した。しかし「その他」が多いのは望ましくないため、中身を細分化する必要があるだろう。今回「その他」に分類した中で多かったのは「性格が4つにわけられるとは思えない」という記述であった。特に「ニュース映像なし条件」の否定的態度で多くみられ、講義前30.0%（6名）、講義後13.8%（4名）、4週間後15.4%（4名）という値であった。この内容は上瀬他（1991）の研究においては「論理的理由」に分類されていることから、本研究においても「客観的理由」として扱うなど、再度分類方法を検討する必要があるだろう。

講義の感想については、織田・菊地（2022）と同様、「様々な心理的な要因で血液型と性格が関連すると思っ込んでいることがわかった」、「血液型と性格には関連がない（根拠が無い）ことがわかった」といった知識に関する感想や、「面白かった、興味深かった」という講義への興味を示す感想、「驚いた、ショックを受けた、がっかりした」という感情に関するものが多かった。織田・菊地（2022）が述べるように、学生は血液型性格判断を否定する情報に接する機会がなかったと考えられ、初めて接する情報に対して興味を持ち、知識として取り入れたと考えられる。今後も機会を見て正しい情報を伝達していく必要があると考えられる。

本研究では、パワーポイントの動画を用いたオンデマンド講義において、血液型性格判断を否定する内容のニュース映像を見せることにより、血液型性格判断に対する態度を長期的に肯定的から否定的に変える効果があることが示された。その背景にはテレビ番組への信頼や、ニュース映像の中にあつた、血液型性格判断が当たらずに落胆した番組スタッフの体験を見たことによる観察学

習、さらにニュース映像の内容が説得力のある物だったことがあると考えられる。否定的態度、肯定的態度の理由としては、双方とも「自らの経験」が多かったが、特に肯定的態度の人の「自らの経験」の割合が非常に高かった。講義の感想からは、織田・菊地（2022）と同様、今までこのような情報に接する機会が無く、興味を持って講義を聴き、知識を身に着けたと考えられた。

今後の課題として、自由記述の分類カテゴリを再考すること、感想や理由を自由記述で求めるだけでなく項目リストを作成すること、等が挙げられる。また自らの経験を信じ、肯定的態度をとり続ける人にどのようにアプローチするかについても検討が必要であろう。今後も様々な機会に、正確な情報を伝えていく必要があると考えられる。

引用文献

- 伊藤哲司（1996）. 子どもたちは古い・血液型性格判断をどう捉えているか① 非科学情報にあふれた生育環境 児童心理, 669, 126-134.
- 上瀬由美子・松井豊（1996）. 血液型ステレオタイプの変容の形—ステレオタイプ変容モデルの検証 社会心理学研究, 11, 170-179.
- 上瀬由美子・松井豊・古沢照幸（1991）. 血液型ステレオタイプの形成と解消に関する研究 立川短大紀要, 24, 55-65.
- 松井豊（1991）. 血液型による性格の相違に関する統計的検討 立川短大紀要, 24, 51-54.
- 松岡圭祐事務所（2006）. ベストセラー作家 松岡圭祐が「血液型で性格は変わらない」ことをネット上で実証 Retrieved from http://prw.kyodonews.jp/prwfile/release/M100155/200606175718/_prw_open.html (2023年12月26日アクセス)
- 宮本博章・田村美恵（1995）. 血液型性格判断を斬る 菊池聡・宮元博章・谷口高士（編著） 不思議現象何故信じるのか (pp. 138-143) 北大路書房
- 村井明日香・浅井亜紀子・宇治橋祐之・齋藤玲・堀田龍也（2021）. 大学生のテレビ番組への信頼度および懐疑的な態度とメディア・リテラシーの関係—ドキュメンタリー番組を中心に— 桜美林大学研究紀要 社会科学研究, 1, 176-191.
- 縄田健悟（2014）. 血液型と性格の無関連性—日本と米国の大規模社会調査を用いた実証的論拠— 心理学研究, 85, 148-156.
- 織田弥生・菊地賢一（2022）. 講義による血液型性格判断に対する態度の変化—対面講義・オンライン講義での検討— 実践女子大学人間社会学部紀要, 18, 67-82.
- 佐藤達哉（1993）. 血液型性格関連説についての検討 社会心理学研究, 8, 197-208.
- サトウタツヤ・上村晃弘（2004）. 血液型性格関連説の最近の動向と問題点（2） 日本パーソナリティ心理学会発表論文集, 13, 56-57.
- 白佐俊憲（1991）. 血液型性格判断の概観 北海道女子短期大学研究紀要, 26, 1-16.
- 総務省情報通信政策研究所（2023）. 令和4年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する

調査報告書〈概要〉 Retrieved from https://www.soumu.go.jp/main_content/000887659.pdf
(2023年12月26日アクセス)

山岡重行（2011）. テレビ番組が増幅させる血液型差別 心理学ワールド, 52, 5-8.

山祐嗣・山口素子・小林知博（2009）. 基礎から学ぶ心理学・臨床心理学（pp. 42-43）北大路書房